



照来っ子

2018(H30)年

10月 9日

No. 11

チャレンジいっぱい!

～ になりたい自分を目指すことができる自分と仲間になろう ～

6日(土)の人権・道徳参観日、学校生活説明会、またPTA人権教育講演会では、大変お世話になりました。学校生活説明会では、学校の抱える課題とその対応に対してご理解いただき、深く感謝申し上げます。また、PTA人権教育講演会では、多様な体験することで育つさと意識についてご講演いただき、本校の教育活動へのご示唆をいただきました。ありがとうございました。

さて、先日、1年生が花を咲き終え種を膨らませた朝顔のつるを丁寧にほどいていました。実りを終えた朝顔の種は、新たな命を芽吹かせるために、つるは、リースづくりの材料にするそうです。

10月は、1年の折り返し地点です。こどもたちは、4月からの半年間の学びを更に高めたり、新たなチャレンジに生かしたりしながら、残りの6か月を、進級や進学に向けて相応しい自分と仲間づくりに励みます。そんな照来っ子のよりよい成長に向け、引き続きご支援ご協力をよろしくお願いいたします。



後期児童会立会演説会



介助犬体験3・4年



手話体験5年



社会見学4年

後期児童会立会演説会でのチャレンジ!

9月27日(木)の児童会立会演説会では、“元気なあいさつの響く学校にしたい”“当たり前のこと(あいさつ、そうじ、言葉遣い)を当たり前にできるような学校にしたい”“活気あふれるイベントを企画したい”等々、照来小学校の仲間全員と目指したい姿を8名の立候補者、そして、それぞれの応援者がしっかり語ってくれました。こうして、仲間と共に頑張りたいという思いを立候補という形で表し、自分の壁を破ろうとチャレンジする姿をなにより頼もしく感じています。

会長; 森下 翔斗 副会長; 岡田 快翔・中井 威織 書記; 村尾 花音・西坂 颯恵

照来小学校 72名の願いを受け止め、自分達の目指す学校の実現に向けて頑張る姿を応援します!

駅伝でのチャレンジ!

今年、30名の児童が駅伝にチャレンジし、放課後練習に励んでいます。駅伝の醍醐味は、たすきをつなぐこと。すなわち、自分のがんばりを仲間のがんばりに、仲間の成長を自分の成長にしながら、心と体を磨いていくところにあると思います。



照来小学校5チームが参加する21日の岸田川駅伝競走大会本番は、自分と仲間のタイムを目標にしながら、仲間と共に大きなチャレンジをする日です。試走へのご協力に感謝申し上げますとともに、仲間の思いをつなぎ、懸命に浜坂サンビーチを駆け抜ける姿に、ご声援をよろしくお願いいたします。

言葉は、こだま。言霊。自分自身。



「こだまでしょうか」
金子 みすず

「遊ぼう」っていうと
「遊ぼう」っていう。

「馬鹿」っていうと
「馬鹿」っていう。

「もう遊ばない」っていうと
「もう遊ばない」っていう。

そうして、あとで
さみしくなって、

「ごめんね」っていうと
「ごめんね」っていう。

こだまでしょうか、
いいえ、誰でも。

10/5(金)の全校集会で“金子みすず”の詩を引用し、次の話をしました。

この詩のように、言葉はこだまのように、誰にとってもやさしく話しかければ、やさしく返してくれます。逆に、きつい言葉がけをすると、きつく返ってきます。でも、振り返る気持ちがあれば、やさしい言葉がけで、やさしく包みこんでくれます。言葉は、こだま。言葉は、言霊（魂が宿ります）。言葉は、あなた自身を表します。どんな言葉を使うかで、あなたの考え方、あなたの仲間との関わり方も変わってきます。

照来小学校の誰もが、誰かの目を必要以上に気にしたり、怯えたりすることなく、また、その逆をすることなく、なりたい自分を目指し、互いに気持ち良く過ごすことができる状態を「人権」が守られているといえます。自分も仲間も、互いになりたい姿を目指すことができるようにしていくために、「言葉」の大切さを理解し、使う言葉を磨き、すてきな言葉があふれる照来小学校にしていきましょう。

一方、大人の立場でこのことを考えてみました。

「言葉は、こだま。言葉は、言霊。言葉は、あなた自身」であるならば、こどもが日々話す言葉は、『こどもそのものを表している』とも捉えられます。

こどもが、「痛い！」と言ったら、こだまなら、「あ～本当だ、痛いね～」と半分の大きさにして返してくれ、その痛さは、半分になります。しかし、私自身の子育てを振り返る中で、また、多くの大人たちが、つい、「それくらい痛くないでしょ！」とか「大丈夫、我慢できるでしょ！」と、こだますることなく、一方的に、否定したり励ましたりして返していないでしょうか。

やわらかい頭と心と体を持ったこどもは、返された言葉をそのまま受け止め、痛さや辛さは一生消えることなく、心の中に押しこめるしかないのです。そうして、痛さや辛さを押しこめた心の器が一杯になり、中学生になると、思春期の荒波の中で全てをはき出し、器を空にするしかないのです。その時、「言葉」を武器に、適切に表現できればよいのですが、器をひっくり返し、空にすることに精一杯のこどもたちは、謝った表現しか出来ず、後の人生や周囲の人々に大きなしこりを残すこともあります。

私たち大人が、こどもにしてやれること。それは、甘やかすということではなく、こだまのように、こどもの言葉をそのまま受け入れること。受けとめる中で、その子に今、何が必要で何をすべきかを考え、自立を促すこと。

大人の持つ大様さとかしこさが、「言葉」を糧に人間形成を図ることができる小学生の時期には、とても大切なのではないでしょうか。